

《論 文》

「英語音声学」の授業内容の考察
—英語教員養成の観点から—*

眞 田 敬 介

要 旨

日本の英語教育に対しては、「話す力」の養成がますます求められている。そのため、その前提となる英語の発音の仕方や指導法を学ぶ必要性が、学習指導要領や「英語教員養成・教員研修コア・カリキュラム」でも言及されている。しかし、注意すべき発音の方法や指導法への具体的な言及はほとんどなく、英語の音声を扱う授業に委ねられている。そこで本稿は、英語教員養成にかかわる科目の一つとしての英語音声学で何を最低限教えるべきかを、筆者の実践報告を交えつつ考察する。具体的には、「日本語に出てこない、または日本語に既存の発音と混同しがちであるため、日本人英語学習者にとって特に注意を要する」と言えるものを選び、その発音の方法と指導法について具体的に論じる。

キーワード：英語音声学、教員養成、コア・カリキュラム、発音の仕方、発音指導法

1. はじめに

本学人文学部英語英米文学科（以下「本学科」）の専門科目の1つである「英語音声学」（以下「本科目」）は、教職課程「中学・高校英語」の教科に関する科目の1つでもある。このことは、本科目が「きちんとした英語の発音ができるようになりたい」というニーズのみならず、「英語の発音をきちんと教えられるようになりたい」という職業特化型のニーズにも応えなければならないことを意味する。以上のことを踏まえ本稿では、教員養成科目の1つとしての英語音声学が最低限扱うべきことを、筆者の授業実践を交えつつ考察する。具体的には、「日本語に出てこない、または日本語に既存の発音と混同しがちであるため、日本人英語学習者にとって特に注意を要する」と言えるものを取り上げ、その発音の際の注意点を上げる。

以下、2節で本科目の概観を行う。3節では本科目で何を手本とする発音としているか、及びそもそも手本とする発音を定めるべきか否かを簡潔に論じる。4節は、「英語教員養成・教員研修コア・カリキュラム」（以下「コア・カリキュラム」）や学習指導要領で英語の音声指導の必要性に言及されていることを確認してから、英語教員養成にかかわる本科目が最低限扱うべき内容

を「英語音声学の知識」「発音能力」「発音指導法」(河内山・有本・中西2013)の3点を意識しながら提示する。5節はまとめである。

2. 本科目の概要

本科目は前期に「英語音声学A」として、後期に「英語音声学B」として開講される。英語を専門に学ぶ本学科の学生が英語の発音を向上させるための方法論を解説し、それに基づいた反復練習等を通して定着させる。発音の仕方を知る上で必要な知識(例:「前舌面」「硬口蓋」などの調音器官, 文アクセントが置かれやすい語の品詞)の解説も行。教科書と参考書は指定しているが、要点をまとめ具体例を補足した資料を筆者が作成し、それを用いて講義している。

前期は、英語の個々の子音と母音(=分節音素)をほぼ全て取り上げ、音声的特徴や発音の仕方を解説している。もっとも、受講者の多くは発音記号に慣れていないので、小テストを通して発音記号と発音を対応させるように促している¹。後期は、前期で学んだ内容を前提に、個々の音素をこえた単位(=超分節音素)の現象(音の連続・変化、アクセント、リズム、イントネーション)を取り上げている。

発音練習の際に十分な個別指導ができるよう、あまり受講者数が多くなりすぎないように留意している。これまでの筆者のクラスの受講者数は、年度により多少ばらつきはあるが、概ね20~30人台に収まる。授業内では、一斉発音練習はもちろん、個別にチェックする時間も随時取っている。学期中に発音試験を複数回行い、そこでは、定着していない発音が見つければその場で指導している。こうすることで、「発音が良くなりたい」という学生のニーズにきめ細かく対応するよう努めている。

3. 手本とする発音について

本題に入る前に、本科目ではどの発音を手本としているか、そもそもある特定の変種の英語を手本にすべきか否かについて、手短かに論じる(川井 2018: 1.3.1節も参照)。

筆者がこれまで使用してきた教科書(竹林・斎藤 2008; 竹林・清水・斎藤 2013)はアメリカ英語を中心に扱っている。より具体的には「テレビやラジオのアナウンサーが使う Network English (放送網英語)」(竹林・清水・斎藤 2013: 4)である。しかし、アメリカ英語とイギリス英語—いわゆる「容認発音」(received pronunciation)または「BBC英語」(BBC English) (ibid.)—で顕著な発音の違いが認められる場合に、イギリス英語を取り上げることもある。例えば、heartの下線部は、アメリカ英語ではrの音色が伴うがイギリス英語ではそうではない。また、sureはアメリカ英語では/ʃʊə/だがイギリス英語では/ʃɜ:/と発音されることもある²。

英語はもはや国際共通語 (lingua franca) となっているので、「アメリカ英語しか見ない」な

どというのは、英語学習者としてはもちろん英語教育に携わる者の態度としても、視野が狭いものと見ざるを得ない。実際、コア・カリキュラムの「英語科に関する専門的事項」の「英語学」分野では、英語教員志望者に「世界で国際共通語として使われる英語の実態について」の理解を促すよう明記されている。このカリキュラムの要請に対しては本科目でも、アメリカ英語以外の種類の英語（例：イギリス英語）に言及し、一定程度配慮している。そもそも、アメリカ英語にも「唯一の標準発音は存在しない」（ibid.）のであるから、アメリカの放送網英語を手本として絶対視する必要は無い。

ところでこのことは、いわゆる英語母語話者の英語（アメリカ英語であれイギリス英語であれ）を本科目での手本にする必要がない、ということを意味するだろうか。日本人英語学習者を見据えて換言するならば、日本語訛りが多く混じる英語（いわゆる「日本人英語」）で良い、となるだろうか。筆者はそうは考えない。その理由を表す次の引用を見られたい（高橋 2010: 6節も参照）。

- (1) 「日本人英語でよいと思っていると、発音がますます日本語に近くなり、カタカナのような英語になる可能性がある。それでもいいという考え方ももちろんありますが、日本人同士だけで話すわけではないので、カタカナ英語を習得してもあまり意味はないでしょう。シンガポール人は、自分たち同士ではシンガポール英語を話しても、他国の人と話す場合は標準英語を話す人が多い。シンガポール英語では通じないからです。（中略）言語は意思伝達の手段なので、通じなければどうしようもないのです」（白井 2013: 72-73）

要するに、日本人英語を使って相手に通じなければ意味がない、ということである。

これについては静（2018）に掲載の次のエピソードが示唆的である。彼の学生の一人が留学中に theater と発音したら Seattle と勘違いされたとあるが、theater には日本語の発音体系に存在しない /θ/ が含まれ、これを /s/（この子音は日本語にも存在する）に代用したために生じたものと考えられる。/θ/ と /s/ の区別については、前者を後者で代用しても理解のしやすさには影響を及ぼさない、という調査結果もある（Jenkins 2006: 137-138）。しかし静（ibid.）を見ると、/θ/ の発音の仕方を修得しておくに越したことはないとも言える。このことから、筆者は「英語母語話者の発音に少しずつでも近づく努力はすべきである」「そのために英語のある特定の変種を手本とすることには価値がある」という立場を採っている。

4. 本科目の授業内容の考察—英語教員養成にかかわる科目として—

4.1. コア・カリキュラムと学習指導要領—本科目とのかかわりから—

以下では、英語教員養成にかかわる科目の1つとしての本科目で何を最低限教えるべきかを考察するが、その前にまず、「コア・カリキュラム」と学習指導要領の中身を、本科目との関連か

ら概観する。コア・カリキュラムは、次期学習指導要領において、小学校での外国語（英語）の教科化と早期化、及び中学・高校の英語教育の高度化を狙うことを背景に、小学校教員及び中学・高校英語教員の養成と研修のあるべき内容や到達目標をまとめたものである。東京学芸大学が2015年に文部科学省から受託し、このカリキュラムをまとめた。本稿では紙幅の都合上、本稿の議論に関係のあるところのみを抜粋する。詳細は東京学芸大学のウェブサイトに掲載の報告書（<http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy>）を参照のこと（以下のコア・カリキュラムの内容は、特に断りのない限り、上記ウェブサイトから入手可能なファイルより引用）³。

小学校教員対象のコア・カリキュラムの項目の名称を見る限り、本科目の内容に特に密接にかかわると思われるものは下記の通りである。

（２）教員養成

a. 授業実践に必要な英語力と知識

→英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）

（３）教員研修

a. 指導に必要な知識・技能

→英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）

b. 英語力

→発音や強勢・リズム・イントネーションを意識した発話

一方で、中学・高校英語教員対象のコア・カリキュラムの項目については、下記のものが本科目の内容に特に関わるとされる。

（４）教員養成

a. 英語科の指導法

→生徒の資質・能力を高める指導：英語の音声的な特徴に関する指導

b. 英語科に関する専門的事項

→英語学：英語の音声の仕組み

（５）教員研修

a. 指導技術

→音声指導

b. 専門知識

→音声指導に役立つ英語音声学

ここで重要なのは、小学校教員対象のものとは異なり、「音声の指導」が明記されているところ

である。すなわち、英語の発音を教員自らができるだけでなく、日本人英語学習者に指導できることが求められているのである。これらの点は、本科目が英語教職課程の科目の1つに指定されているのであれば、授業の設計においても意識されねばならない。

ただし、コア・カリキュラムの項目や解説においては、個々の発音の事項や発音指導法がほとんど踏み込まれていない。新学習指導要領の中学校「外国語」（平成29年3月公示）及び高等学校「外国語」（平成30年3月公示）では、「語と語の連結による音の変化」「語や句、文における基本的な強勢」「文における基本的なイントネーション」に言及されているが、具体的にどの部分に注意すべきかの言及はない。結局、こうした知識や指導法の扱いは個々の英語音声学の授業に委ねられているのが現状である。

4. 2. 授業内容の提案

本科目では英語の音声に関わる事項を一通り教えることを基本としているが、本稿では紙幅の都合上、日本人英語学習者を見据え「日本語の発音体系に出てこない、または日本語の発音体系に既存のものと混同しがちであるため、日本人英語学習者にとって特に注意を要する」と言えるものを最低限扱うべきものとして取り上げる⁴。このことを踏まえ、それぞれの発音やそれをどのように指導していくかを、主に筆者が2018年度に使っている教科書（竹林・清水・斎藤2013）に基づき述べる。例となる語・句・文は、特に断り書きの無い限り、上掲書から引用する。発音指導法や言い回しなどは特に断り書きのない限り筆者独自のものである。

なお、筆者は音声学の専門用語をあまり使わず、英語教員を目指す本学科の学生が、現場に立ってなるべくそのまま使えるような平易な言い回しを追求している（この際特に参考になるのが静2009である）。これを踏まえ、以下の説明で専門用語を使うのは必要最低限に留める。こうした方針は、河内山・有本・中西（2013）が指摘する次の現状にも対応可能であろう。河内山・有本・中西によると、大学に設置される英語教職課程において、発音に関する学習内容は「多くが英語音声学の知識に関するもの、あるいは音声学の知識と発音能力の2つの範囲に留まって」（2013: 127）いる。一方で、音声学の知識を用いてどのように発音するかを「生徒にどう伝え、あるいは生徒の不適切な発音をどう目標音に近づけるよう矯正するのか」（ibid.）という発音指導法の学習が不十分である。そのため、本科目の内容の中に発音指導法を平易な言葉で提示する試みは、もっと行われるべきであろう⁵。

また本稿では、平易な言い回しによる説明を求める一環で、日本人英語学習者（全員が英語の発音記号を理解し、瞬時に発音できるわけではない）に発音をイメージさせやすくするために、あえて発音を片仮名で表記することがある。片仮名表記の使用は、それが英語の発音に厳密に対応しているとは限らないことを理解し、教員が日本語の発音と英語の発音の違いに通じており（例:「シ」は/si/でなくて/ji/に近いということを理解している）、発音の仕分けもできるのであれば、それなりに効果的であると筆者は考えている。そのため、以下でも片仮名表記を随時用いる。

4. 2. 1. 子音

本節では、具体的に次の英語の摩擦音の一部—/f/, /v/, /s/, /z/, /θ/, /ð/—, 及び/l/と/r/を取り上げる。以下にどの点に注意して指導すべきかを説明する⁶。

4. 2. 1. 1. /f/と/v/

/f/ (例:five) と/v/ (例:voice) の発音を筆者が指導する際は、上の歯を下唇につけた状態で息を出す (竹林・清水・斎藤 2013: 32-33) ことを徹底させている。筆者の見る限り、/f/を発音する時に、両唇をすばめ、ケーキのろうそくに息を吹きかけるような方法で発音する学習者が多いので注意を要する⁷。また、/v/を発音する時は、両唇をくっつけて発音する/b/で代用するケースが目立つ (例えば、veryをberryのように発音してしまう) (竹林・清水・斎藤 2013: 33)。この/f/と/v/の発音指導の際は、学習者の上の歯の位置を見れば良いので、発音がきちんとできているか否かを比較的外から見やすいと言える。

4. 2. 1. 2. /s/と/z/

次に、/s/と/z/は、特に/i/や/i:/が後続する場合 (例:sip, see, easy, zeal) に注意を要する (静 2009: 56, 62, 及び竹林・清水・斎藤 2013: 36)。例で挙げた語の下線部の発音を片仮名で書くとそれぞれ「スイ」「スィー」「ズィ」「ズィー」となるが、多くの学習者がそれぞれ「シ」「シー」「ジ」「ジー」と発音してしまうのである。前者二つは/s/ではなく/ʃ/であり、後者二つは/z/でなく/ʒ/である。そのため、sipがship、seeがsheに聞こえてしまうのである。これらの発音様式は歯の奥における舌尖の動きによるものであり、外から見えにくいいため、指導の際は特に学習者の発音に耳を傾ける必要がある。

4. 2. 1. 3. /θ/と/ð/

次に、/θ/ (例:think) と/ð/ (例:this) の発音指導の際は、「舌尖を上の前歯の裏に軽く当てた状態で息を出す」(竹林・清水・斎藤 2013: 34を参照) か「舌尖を軽く歯で噛む」ようにと指導している。これも注意しないと、日本語のサ行やザ行に代用する傾向が強い。例えば、thinkを「シンク」(sinkのように) あるいは「シंक」と発音する学習者が少なからずいる。なお、舌尖を上歯の裏につけているかも外からは比較的に見えやすいので、指導もしやすいであろう。

ところで、「舌尖を軽く歯で噛む」という発音の仕方に言及していない本もある。筆者の確認する限り、静 (2009)、竹林・斎藤 (2013)、那須川 (2018) では言及されていない。しかし、竹林・清水・斎藤 (2008: 94-95) は「初期の発音指導でしばしば舌の先を上下の歯の間から前へ出すように指導することがあるが、これはややオーバーではあるが/s/よりも舌を前へ出せという意味ではそれなりの効果がある」と述べている。また、松坂 (1986: 78) や今井 (2007: 52) も、この発音の仕方の効果を認めている。このことから、筆者の授業ではこうした発音の仕方を

間違いと見なして矯正することはしていない。

この /θ/ と /ð/ の発音でもう一つ注意して指導すべき点がある。それは、これらの発音の際「/s/ や /z/ と比べて息の出方が弱い」という点である（竹林・清水・斎藤 2013: 34-35 を参照）。/θ/ と /ð/ を発音する際に舌先を上歯の裏に軽く当てるため、/s/ と比べてすき間が狭く、息が出にくくなると思われる。実際に、息の出にくさを学生に体験させると学生の理解が促される。一方、/s/ や /z/ は舌先を上歯の茎に近づけて、そうしてできた狭いすき間を息が通ることのできる摩擦音であるが、これらは /θ/ や /ð/ よりも幾分すき間が広いので、息を続けて出しやすい。従って、例えば think と sink を聴き比べさせる際に、前者が後者よりも息の出方が弱いことを注意させ、学生の発音練習でも意識させれば良い。

4. 2. 1. 4. /l/ と /r/

/l/（例: light）と /r/（例: right）の発音の違いとして強調すべきなのは、「口の中における舌先の位置」である。/l/ は専門的には「側面音（あるいは側音）」と分類される。舌先を上歯の茎の上にしっかりつけたまま「イー」や「ウー」と声を出すと、その声は舌の両側にできた隙間を通っていく（竹林・清水・斎藤 2013: 54-55 を参照）。これが側音という名称の由来であるが、/l/ の発音の練習の際にこの由来を説明すると、学習者も /l/ の発音の仕方をイメージしやすいようである。

これに対し、/r/ は舌先を絶対にどこにも付けない（静 2009: 102-103, 及び竹林・清水・斎藤 2013: 62）ことを強調すべきである。では /r/ の発音の際の舌の動きをどのように指導すれば学習者はイメージしやすいであろうか。筆者は静(2009: 102)に倣い、「ル」を言おうとして舌先を上歯の茎に当てた状態で止めさせ、そのまま舌先をのどの奥に向かって反らせていき、舌先を口の天井から離すよう指導している。この状態で、かつ唇をやや突き出しながら「ウー」と言うことで /r/ の音を出すことができる。

なお、/l/ と /r/ は日本語のラ行の音とは似て非なる音であることを強調することも重要である。ラ行の音は、/r/ と異なり舌先を上歯の茎にくっつけるが、/l/ はどしっかしくっつけず、さっとなつて離す。こうした日英語比較も実演を交えて解説することで、/l/ と /r/ の発音の練習と習得がさらに促進されるであろう。

4. 2. 2. 母音

本節で具体的に取り上げる母音は、片仮名表記すると「ア」になるもの（/æ/, /ɑ/, /ʌ/）, 「アー」になるもの（/ɑ:/, /ɑɑ:/）, 短母音と長母音で発音方法が少し異なるもの（/ɪ/ と /i:/, /ʊ/ と /u:/）, 二重母音である。

4. 2. 2. 1. /æ/, /ɑ/, /ʌ/

これら3つの発音の違いを、発音する時の口の形、及び音の性質の2点から押さえておきたい⁸。

まず、/æ/ (例: cap) を教える時は、『『エ』と発音する時の口の形のまま『ア』と発音する』よう指導している⁹。/æ/は(発音記号がaとeを合わせたものに見えることから分かる通り)日本語の「ア」に若干「エ」の音が混ざる感じの音となる。そうした発音の性質を分かりやすく伝えるために、「エ」の口の形で「ア」と発音するよう学生に指導している。もう1つ意識させているのは、「長母音ではないが、少しだけ伸ばして発音する」という点である。例えばbagなら「バッグ」よりは「バーク」に近くなるよう指導するのである。日本人英語学習者がcapを短い音で発音すると、英語では/kʌp/ (cup) に近く聞こえてしまう。

次に/ɑ/ (例: cop) は、以下の2点を意識して練習させている。第1に、「ア」を発音する時に少しだけ唇を縦方向に広く開ける。第2に、「ア」に若干「オ」の音が混ざるように発音させる(これは第1の口の形をすれば自然と出る)。なお、後者のこの性質は、/ɑ/を含む単語はしばしばoの綴りが与えられる点と関連付けて教えるのも良いであろう。

最後に、/ʌ/ (例: cup) は「ア」に近いが、次の2点を意識して練習させるようにしている。第1に、口を小さめに開けること。筆者は「ボーっとしていて口が半開きの状態」や「ため息をつく時の口の開き方」¹⁰をイメージさせるように指導している。(次節の/ɑ:/を発音する時の口の開け方も参照)。第2に、短く音を発すること (/æ/と比較)。何かを思いだして「あっ」と発音する時の音の長さをイメージさせるとよいであろう。

4. 2. 2. 2. /ɑ:/ と /ɑɑ/

ここでは、/ɑ:/ (例: hurt) と /ɑɑ/ (例: heart) は唇の開く大きさに違いがあることを教える必要がある。前者は、4.2.2.1節の/ʌ/と同様、口を小さく開ける。一方、後者は口を大きく開ける(竹林・清水・斎藤 2013: 82)が、次の2つの点で日本語の「アー」と異なる。第1に、少しだけ唇を縦方向に広く開ける(これは、前節で見た/æ/との大きな違いでもある)。第2に、喉の奥にある口蓋垂を見せるよう意識して口を開ける¹¹。ともあれ、口を小さく開ける/ɑ:/と大きく開ける/ɑɑ/をしっかりと区別するよう指導すべきである。

4. 2. 2. 3. 発音方法が異なる短母音と長母音のペア

全ての長母音は短母音を単に長く伸ばせば良い、というわけではない。発音器官の動かし方が互いに異なる場合もあるからである。具体的に、/i:/と/i/, /u:/と/u/のペアは長母音と短母音とで唇の状態が異なる。

まず、/i:/と/i/を見よう。長母音/i:/は片仮名で書けば「イー」であるが、実際は唇を強く横に引っ張る(竹林・清水・斎藤 2013: 80)ようにして発音する。写真を撮られる時に「ハイ、チーズ」と言う際の「チー」の唇の動きを学習者にイメージさせると良いだろう。具体例としてfeelの下

線部は「フィー」で良い。一方で、短母音 /ɪ/ は日本語の「イ」よりは唇を半開きに近い状態で開け、「イ」と「エ」の中間（＝「イ」にも「エ」にも聞こえる）の音を出させるようにすると良い（静 2009: 174; 竹林・清水・斎藤 2013: 72）。すなわち、長母音の場合と異なり、唇を横に引っ張らなくて良い。具体例を挙げるならば、fillをはっきり「フィ」と発音するよりは、「フィ」にも「フェ」にも聞こえる（すなわち、fillがfellに近く聞こえる）ように発音させると良い。

次に、/u:/ と /ʊ/ を取り上げる。両者とも唇を突き出す¹²ようにして発音するが、長母音 /u:/ は短母音 /ʊ/ よりもさらに唇を突き出して発音する。一方、/ʊ/ は「ウ」と発音するがやや「オ」に近く聞こえることがある（静 2009: 178-179; 竹林・清水・斎藤 2013: 78）。例えば、fool (/u:/) と full (/ʊ/) を比べると、前者は「フル」と聞こえる一方、後者は「フウ」にも「フォウ」にも近く聞こえることを体験させ、それを真似させると良い。なお、beautifulを冗談交じりで（あるいは大げさなまでに英語母語話者の真似をするように）「ビューティフォー」と発音されるのを聞いたことがあるが、この「フォー」(ful)は短母音 /ʊ/ の性質を捉え、大げさに（あるいはコミカルに）発音したものと言ってよいかもしれない。

4. 2. 2. 4. 二重母音

二重母音とは文字通り母音が2つ重なった音のことである。例えば、eye (/aɪ/) は /a/ と /ɪ/ の2つの母音から構成される。ここで重要なのは、1つ目の母音を強く読み、2つ目の母音は添える程度に軽く読ませる、という点である¹³。先のeyeの発音を片仮名表記するなら「アイ」とすると学習者はイメージしやすいであろう。

eyeの発音は、例えば日本語の「愛」と比べさせると良い。「愛」も「あ」と「い」の2つの母音から成るが、少なくとも「愛」という語のみを読む場合に、2つ目の母音を意識的に弱く読むことはない¹⁴。言い換えれば、eyeを発音させる時に「愛」とならないように注意が必要である。というのも、eyeと「愛」は音節数が異なり、eyeは1音節であるが「愛」は2音節だからである。ある語が本来持つ音節の数を間違えると、その語やそれを含む句・節・文を読む時のリズムに影響する（4.2.5節参照）。そのため、二重母音の発音の仕方によっては音節数に違いが生じ、指導に注意を要するのである。

4. 2. 3. 子音の連続

本節と次の4.2.4節は、英語の音声に頻繁に見られる音の連続を扱う。特に、特定の子音が続く場合に見られる変化（本節）と、単語間の音連続（4.2.4節）に注目する。

子音の連続は、日本語では通常見られないが、英語ではごく一般的に見られる。例えば、strongは語頭に /s//t//r/ の3つの子音が連続している。日本語の片仮名表記では「ストロング」に対応するが、これを発音記号で表記すると /sutorɒŋɡu/ となる。全ての子音の後に必ず母音が付いているのが特徴であり、英語との最大の違いでもある。子音が連続する箇所を発音させる

際は、子音と子音の間に母音を挿入させないように注意が必要である（竹林・清水・斎藤 2013: 113）。

4. 2. 3. 1. /tn/, /dn/

これらの音連続の特徴は/t/と/d/がほとんど聞こえなくなる点である。button (/bʌtn/) と sudden (/sʌdn/) を例に、この音連続の指導方法を述べる。

まず、/bʌ/及び/sʌ/は通常通り発音させる。その後、/t/や/d/を発音するために舌先を上の歯茎にくっつけさせるが、この時舌先を離して息を破裂させて/t/や/d/を実際に発音させないことが、第1の重要な点である¹⁵。その代わりに、舌先を歯茎にくっつけたまま、鼻から息を抜きつつ「ンー」という音を出させるのが、第2の重要な点である。従って、buttonとsuddenの発音を片仮名表記するならば、「バトゥン」や「サドゥン」ではなく「バツンー」や「サツンー」に近い。ただし、「ンー」を発音する時に舌先を歯茎にくっつけることを徹底させるべきである。なぜなら、英語の/n/は必ず舌先を歯茎にくっつける一方で、日本語の「ん」は必ずしもそうならないからである¹⁶。この/n/と「ん」の相違点は、4.2.4節の単語間の音連続においても重要になる。

4. 2. 3. 2. /l/と別の子音の連続

ここで扱うのは、milkのように「/l/+別の子音」の場合と、littleのように「別の子音+/l/」の場合である。ただし、注意点は共通しており、/l/を「ル」と発音するのではなく、「ウ」や「オ」に近く発音させれば良い。milkなら「ミルク」よりは「ミウク」、littleなら「リトル」よりは「リトー」の方が、英語母語話者の発音に近い（竹林・清水・斎藤 2013: 112-113も参照）。

なお、/l/は舌先を歯茎にしっかりつけて発音する、と4.2.1.4節で述べた。しかし本節で扱っている音の連続において/l/を発音する時は、筆者の観察によると、必ずしも舌先を歯茎にしっかりくっつけて発音していないように思われる。例えば、アメリカ人歌手B. B. Kingの曲の1つに“Sweet Little Angel”というのがあり、歌詞の一部にLittle angelという句が出てくる。筆者が聴く限り、littleの語末の/l/とangelの語頭の/ei/が繋がっていない。もしここが繋がっていたら、「リトレインジェウ」と聞こえるはずだが、筆者には「リトエインジェウ」のように聞こえた。これは/l/と/ei/が繋がっていないことを示す¹⁷。

4. 2. 4. 単語間の音連続

英語では、句以上の単位（例：節、文）のまとまりを発音すると、単語と単語が繋がって聞こえることが頻繁に生ずる。例えばOnce upon a timeは1語1語丁寧に発音されるわけではなく、単語同士が繋がって「ワンサポナタイム」のように聞こえる。それぞれの単語が丁寧に発音されるわけではなく、繋がって発音されるということに慣れておかないと、語と語の境目の認識が不

明瞭となり、リスニングの理解度に影響する（深澤 2015: 84-85）。また、それぞれの単語を丁寧に発音することは英語の音声の仕組みと異なるため、英語音声の産出が伴うスピーキングのスムーズさにも影響する。

こうした単語間の音連続で、特に注意すべきパターンを以下に4つ提示する（ここで取り上げた以外の音連続のパターンは深澤 2015を参照）。以下、紙幅の都合上、2語が連続する場合に考察の対象を限定し、1番目の語をW1、2番目の語をW2と表記する。

4. 2. 4. 1. 「W1の語末の子音」 + 「W2の語頭の母音」の連続

これは、前節で紹介したOnce upon a timeに見られる現象である。onceの/s/とuponの/ʌ/が繋がり、uponの/n/とa (/ə/) が繋がり、その結果「ワンサポナタイム」と聞こえるのである。授業ではいくつか例文を挙げ、どの部分の連続が見られるかを指摘させた後に、音を連続して音読させるようにしている。

日本人学習者にとっては、W1の語末の子音が/n/の場合の音連続に特に注意が必要と思われる。4.2.3.1節で述べた通り、英語の/n/は必ず舌先を歯茎にくっつける一方で、日本語の「ん」は必ずしもそうならない、という違いがあるからである（静 2009: 137-141においてもこの種の音連続の注意喚起が成されている）。例えば、When I (静 ibid.) を発音させて「ウェンアイ」としてはならず、「ウェナイ」と発音するのが良い、ということである。なお、こうした日英差は、語中に「ん」を含む日本語が英語ではどのように発音されるかを考えさせてみると良い。例えば、人名の「じゅんいち」の英語発音は「じゅんいち」ではなく「ジュニチ」に近くなる。こうした違いから、W1の語末の子音が/n/である場合の音連続に対し注意を喚起するのも良いであろう。

4. 2. 4. 2. 「W1の語末の子音」と「W2の語頭の子音」が同じまたは類似の場合の連続

「W1の語末の子音」と「W2の語頭の子音」が同じ場合、その2つの音が繋がって聞こえる。片方の音が聞こえづらいと言ってもよい。例えばgood dayは、W1の語末もW2の語頭も/d/である。この場合に、2つの/d/がくっついて聞こえる。あるいは「片方の/d/が聞こえない」としても良い。こうして、good dayが「グッドデイ」ではなく「グッデイ」と聞こえるわけである。他にtake care (/k/と/k/がつながって「テイケア」のように聞こえる) やMike's seat (/s/と/s/がつながって「マイクスイート」のように聞こえる) などがある。

次に、「W1の語末の子音」と「W2の語頭の子音」が類似の場合を見よう。何をもって類似と見なすかは複数のパターンがあり得るが、ここでは「有声音か無声音かで異なるが、発音の時に使う部位（例：舌、歯茎）や発音方法（例：/d/や/b/などの閉鎖、/f/や/v/などの摩擦）の仕方は共通」の場合と、「発音の時に使う部位は異なるが、発音方法が共通」の場合の2つを見ていく。

まず、前者の事例としてI've foundを見よう。W1の語末の/v/とW2の語頭の/f/は、4.2.1.1節で見た通り、いずれも上の歯を下唇につけた状態で息を出すことで産出される音であるが、

/v/は有声音で/f/は無声音である。この時、W1の方（ここでは/v/）がかなり聞こえづらくなり、I foundと区別がしづらくなることに注意させるとよい¹⁸。

次に、後者の事例としてgood byeを挙げよう。W1の語末の/d/とW2の語頭の/b/は、舌先を歯茎に付けて発音するか(/d/)、両唇をくっつけて発音するか(/b/)という違いはあるが、いずれも閉鎖音であるという点で共通している。この場合もW1の語末の子音（ここでは/d/）の方が消えて聞こえる。good byeを「グッドバイ」と発音する人はほぼ皆無で、「グッバイ」と発音する人がほとんどであると思われるが、それにはこうした音連続が関わっているということを教えると、この種の音連続がより具体的に理解できるであろう。

4. 2. 4. 3. 子音3つの連続における/t/と/d/の脱落

W1とW2の境目で子音が3つ連続し、その内の真ん中の子音が/t/や/d/である時、その/t//d/がしばしば脱落する（竹林・清水・斎藤 2013: 115-116）。例えば、don't knowはW1とW2の境目で/ntn/の3つが連続するが、この時真ん中の/t/が聞こえづらくなり、「アイドンノウ」のように聞こえる。他にmust goの/stg/における/t/、smoked salmonの/kts/における/t/、そしてcorned beefの/ndb/における/d/も脱落する。後者2つの例は、外来語として日本語に入った場合の表記を思い出すと興味深い。それぞれ「スモークサーモン」「コンビーフ」となり、「スモークトサーモン」「コンドビーフ」ではないからである。この類例として他にiced coffee「アイスコーヒー」やpassed ball「パスボール」がある。

4. 2. 4. 4. アクセントが置かれない場合の/h/の脱落

例えば、完了形構文を作るときの助動詞として機能するhaveにはアクセントが置かれない（4.2.5.2節も参照）。この場合のhaveの/h/はしばしば脱落する。would have doneのwould haveは「ウドハヴ」ではなく「ウダヴ」に、could have doneのcould haveは「クドハヴ」ではなく「クダヴ」に、それぞれ聞こえる。発音の際もこれをまねさせると良い。

なお、ここでの/h/の脱落は、短縮形の表記に反映されたと考えてもよいであろう。短縮形はくだけた早口の話し言葉で使われることが多い（Huddleston and Pullum 2002: 1612）が、この時、would'veやcould'veと表記できる。まさにhaveの/h/の脱落が表記にも表れている例である（この事例は音声現象と文法現象の交流地点としても注目に値する）。

4. 2. 5. アクセントとリズム

4. 2. 5. 1. アクセントの日英語比較

ここでのアクセントとは「音声的な目立ち度の高い箇所」を意味する。アクセントを導入する際は、英語と日本語でアクセントの性質が異なること（竹林・清水・斎藤 2013: 119-121など）にまず触れておくべきである。アクセントの性質の違いを踏まえておくことで、英語のリズムを

身に付けることができ、それがリスニングの理解度やスピーキングのスムーズさに影響するからである。

まず、英語のアクセントは音の強弱で作られることに注意させたい¹⁹。例えば、名詞としてのrecordはreの部分が強く発音されるのに対し、cordの部分は弱く発音される。逆に、動詞としてのrecordはreの部分が弱く発音され、cordの部分が強く発音される。ここで注意すべきは、強い箇所ははっきり発音させ、弱い箇所は短く曖昧に発音させることで強弱のメリハリをつけさせることである。実際、reとcordの聞こえ方は名詞の場合と動詞の場合とで明確に異なる。reは、名詞の場合だとはっきり「レ」と発音するが、動詞の場合だと「リ」とも「レ」とも区別がつかない程度に曖昧に発音される。cordについては、名詞の場合だとほんの少し伸ばす（伸ばしているのか否かが曖昧）程度で良いのに対し、動詞の場合は明確に伸ばす必要がある。

なお、本科目の受講生を観察する限りでは、この弱い発音の再生を苦手とする受講生が案外多い。アクセントに関わる発音のチェックをすると、この弱く短く曖昧に発音する箇所を指摘することが多いのである。弱い箇所は強い箇所よりも意識が届きにくいからであろう。従って、弱いところは弱く曖昧な発音を徹底練習させる必要がある。

一方、日本語のアクセントは強弱よりはむしろ高低で作られる。例えば、「橋」は「は」よりも「し」の部分の音が高くなる一方で、「箸」は「は」の方が高くなる。しかし、ここで音が低くなる箇所が高くなる箇所よりも弱く曖昧に発音されることは通常はない。「橋」なら「は」が極端に弱く発音され、「は」とも「ひ」とも「ふ」とも区別がつかないくらい曖昧に発音される、ということは（通常は）ない。このような日英差は、ある英単語とそれを由来とする日本語の外來語を対比させると良い。例えば、present（「プレゼント」を意味する名詞として）と「プレゼント」とを比べよう。presentのsentははっきり「ゼント」と発音するよりは「ズント」とも聞こえる程度に曖昧に発音すると良い。しかしそうした曖昧さは日本語の方の「ゼント」には生じず、はっきり「ゼント」と発音する。このような比較を通じ、日英語のアクセントの違いを際立たせ、指導することができる。

4. 2. 5. 2. 文レベルのアクセントとリズム

前節で「強い箇所ははっきり発音し、弱い箇所は短く曖昧に発音する、というメリハリをつける」ことに注意すべきと述べたが、これは文レベルにも適用される。こうしたメリハリが英語らしいリズムを生む²⁰。そこで、文レベルのアクセントがどこに置かれやすいか（あるいは置かれにくい）の原則を提示するとよい（竹林・清水・斎藤 2013: 129）。

まず、文中でアクセントを受けやすい語は、「内容語」と呼ばれる意味が比較的具体的にイメージしやすいものである。これには名詞（例:apple, car）、形容詞（例:easy, tall）、数詞（例:two, first）、日本語の「こ・そ・あ・ど」に対応する指示詞と疑問詞（例:this, who）、一般動詞（例:like, read）、副詞（例:easily, soon）、感嘆詞（what, how）がある。

一方で、文中でアクセントを受けにくい語は、「機能語」と呼ばれ、内容語ほどは意味が具体的にイメージしにくいものである。例えば、冠詞（例:a, the）、人称代名詞（例:he, she）、関係詞（例:which, who）、不定形容詞（「いくらか」という意味のsomeやany）、助動詞（例:can, 完了形を作る際のhave）、be動詞、前置詞（例:at, in）、接続詞（例:and, but）がある。

これらの原則を踏まえると、次の文で強く読まれる箇所とそうでない箇所が見えてくる。

(6) This is the house that Jack built. (マザーグース)

強く読まれるのはthis（指示詞）、house（名詞）、Jack（名詞）、built（一般動詞）である。残りのis（be動詞）、the（冠詞）、that（関係詞）は弱く読まれる。こうした原則を確認してから、強弱のメリハリを意識して何度も音読練習させると良い。なお、筆者の見る限り、弱く読むところを弱く読む方が日本人英語学習者にとっては不慣れだ、というのはこの文レベルのアクセントでも見られる。そのためここでも「弱く読む語を極端に弱く短く曖昧に読ませる」という指示を出して練習させるべきである。

ただし、これらはあくまで原則であり例外も生ずる。ここでは2種類の例外を挙げる。第1に、内容語であっても意味が漠然とした語は、重要な情報を担うと判断されづらくなり、弱く発音される。例えば、漠然とした人・ものを指す名詞（thing, personなど）がある（竹林・清水・斎藤 2013: 131）。第2に、機能語であっても文脈上強調や対比をさせたい、すなわち重要な情報を担うと判断できる場合は強く発音される。例えば、(7a)の代名詞myは「みなさんはどう思われるか存じませんが、私はこう思う」のように「私」の部分を強調したい場合に強く発音される（類例にas far as I knowのIがある）。(7b)の前置詞forとagainstは互いに対比させるべく、両方とも強く発音される。

(7) a. In my opinion

b. They voted for the bill (not against it).

こうした2種類の例外を踏まえるならば、アクセントの強弱を説明する際に、「意味の具体的なイメージのしやすさ」と「重要な情報か否か」は別々に提示すると良いだろう（もっとも、「内容語は重要な情報を担い、機能語はそれほど重要な情報を担わない」というのは、典型的には成り立つと考えられる）。

このように強弱のメリハリをつけて読ませることで生まれる英語らしいリズムには、しばしば、アクセントの置かれる箇所が時間的にはほぼ等しい間隔で現れる傾向が見られる（竹林・清水・斎藤 2013: 135-136）。例えば(6)だと、アクセントの置かれるThisとhouseの間、houseとJackの間、そしてJackとbuiltの間がほぼ同じ間隔となるのである。筆者は、この性質を学習者

に体感させるために、手拍子を取って（（6）の場合だと等間隔で4回手を叩く）発音させている。この手拍子についていくように発音するには、各々の語を強くはっきり読むのではなく、機能語を弱く短く曖昧に読まざるを得なくなる。これに慣れていけば、徐々に英語らしいリズムで発音ができるようになっていく。

4. 2. 6. イントネーション—意味とニュアンスとのかかわり—

英語のイントネーションの指導が重要になるのは、イントネーションの使い分けが表現の意味やニュアンスを左右するからである。英語のイントネーションの種類は複数あるが（詳細はウェルズ 2009を参照）、ここでは、竹林・清水・斎藤（2013）で扱われている「上昇調」「下降調」「下降上昇調」のみに言及する。具体的には、英語の疑問文におけるイントネーションと、「含意的下降上昇調」を取り上げる。

4. 2. 6. 1. 疑問文におけるイントネーション

疑問文のイントネーションは、Yes-No疑問文（8a）とWH疑問文（8b）とで典型的に使われるイントネーションが異なる。

（8） a. Did you say something?

b. Why did you say that?

前者は典型的には、情報が「未完(incomplete)」(ウェルズ 2009: 111)であり「不確実」(竹林・清水・斎藤 2013: 144)であることを表す上昇調が使われる。これは、その疑問文の答えがYesかNoのいずれかを断定できず迷いが生じている気持ちの表れであると説明すると良いだろう。一方、後者は、典型的には「自分の言っていることが潜在的に完結した(complete)のものであり、自信(confidence)をもって、確定的に(definitely)、留保なしに(unreservedly)、それを表現しているということ」(ウェルズ 2009: 35)を表す下降調で発音される。この理由は、疑問詞で表された箇所の情報を求めており、Yes-No疑問文ほどは、質問して相手に答えさせるという負担をかけることをすまなく思う必要が少なくなっていることが多いから(今井 2007: 161)と説明すると良いかもしれない。ただし、WH疑問文でも柔らかいニュアンスを出したい場合や遠慮がちな場合などでは上昇調を用いることができることは、学習者に対して補足しておいて良い。

次に、ある種の疑問文では、イントネーションが変わると文の意味やニュアンスが大きく変わる。1つは付加疑問文である。次の（9）を上昇調で読むと、「彼が英語教師である」ことにあまり自信がなく、遠慮がちのニュアンスが込められる。逆に下降調で読むと、「彼が英語教師である」と確信しているが、念を押して確認する（それゆえ、上昇調で読まれる場合より確信を持っている）というニュアンスが込められる。筆者のクラスの学生には、WH疑問文以外の疑問文は

一律に上昇調で読む習慣が付いていると見受けられる人もいるので、こうした付加疑問文のイントネーションは特に注意して指導している。

(9) John's coming to the party, isn't he?

もう1つは「AかBかいずれか」を選ばせる選択疑問文である。(10)を見よう。

(10) Do you want coffee, or tea?

ここでcoffeeを上昇調で、teaを下降調で発音すると、「紅茶とコーヒーとどちらがいいですか?」のように相手に選択させる意味になる。一方、teaのみを上昇調で読むと、「紅茶かコーヒーか何か飲み物はありますか?」という意味になり、紅茶とコーヒーのいずれか一方を選択させるのではない(この場合、coffeeの後のカンマは付されない)。これらの意味の違いは、英語ではイントネーションで表すことができるが、日本語ではそうはいかない(上で異なる和訳が与えられていることからわかるであろう)。また、筆者の観察では、前者の事例は中学・高校でも教わるようだが、後者の事例を教わっていないという学生が少なくないので、毎年注意して指導している。

4.2.6.2. 含意的下降上昇調

下降上昇調とは、文字通り下降調と上昇調が合わさったもので、英語特有のイントネーションである(竹林・清水・斎藤 2013: 145-146)。前節で言及した上昇調と同様、調子を和らげる効果があるが、ここでは特に、ウェルズ(2009: 2.6節・2.7節)の言う「含意的下降上昇調」を取り上げる。

含意的下降上昇調は、「話し手が必ずしも言葉にすることなく何かを含意している(含みを持たせている)」(ウェルズ 2009: 38)ことを表し、下降上昇調の持つ最も典型的な意味とされる。具体例は次の通り。

(11) a. He's nice.

b. I can read English.

(11a) はniceを下降上昇調で読むと、「彼は良い人である」ということは断言しつつも、そのほかに言いたいことがある(例えば、「良い人だが仕事ができない」)ことを匂わせる効果がある。(11b) はreadに核を置いて下降上昇調で読む(より詳細には、readの/ri:/にアクセントを置いて、そこから音を下げて、Englishの/ɪŋ/で再び音を上昇させる)と、「英語を読むことはできる」ということを断言するが、例えば「しかし書くことはできない」などといった言外の意味をほの

めかすのである。

このように、含意的下降上昇調はあるメッセージを暗に示すものであり、このイントネーションの原則に慣れておくことは、英語でのコミュニケーションの力の向上につながる事が期待される。英語でのコミュニケーション能力がますます要請される中、この含意的下降上昇調は本科目の授業で取り上げるべきものの一つと言える。

5. おわりに

以上、英語教員養成にかかわる科目の1つとしての英語音声学で最低限教えるべき内容をまとめた。具体的には、まず、日本人英語学習者にとって理解や習得が難しく、注意すべきと思われる発音を選んだ。その上で、それらの音声的特徴を踏まえ、発音の仕方や指導法を、発音の仕方を指導するのにすぐに役立つようになるべく平易な言葉で提示した。本稿が「発音指導に自信がない、どのように指導すればよいのか分からない」（河内山・有本・中西 2013: 128）という英語教員志望者、及び現役の英語教員の一助となれば幸いである。

参考文献

- 今井邦彦. 2007. 『ファンダメンタル音声学』. 東京: ひつじ書房.
- ウェルズ, J. C. (長瀬慶来監訳) 2009. 『英語のイントネーション』. 東京: 研究社.
- 小川直樹. 2009. 『イギリス英語でしゃべりたい! UK 発音パーフェクトガイド: これであなたもイギリス人?!』. 東京: 研究社.
- 川井一枝. 2018. 「なぜ英語教育において音声研究の視点が重要か?」. 西原哲雄(編)『英語教育と言語研究』(朝倉日英対照言語学シリーズ[発展編]4), pp.13-36. 東京: 朝倉書店.
- 河内山真理・有本純・中西のりこ. 2013. 「教職課程における英語発音指導の位置づけ」. 『外国語教育メディア学会機関誌』50, pp.119-130.
- 静哲人. 2009. 『絶対発音力—マトリックス方式で脱日本人英語—』. 東京: ジャパンタイムズ.
- 静哲人. 2018. 「そりゃあ、通じるわけないわ」. ブログ *Kyle's Kingdom* の2018年9月18日のエントリー記事 (URL: http://cherryshusband.blogspot.com/2018/09/blog-post_18.html).
- 白井恭弘. 2013. 『ことばの力学—応用言語学への招待』. 東京: 岩波書店.
- 高橋基治. 2010. 「第二言語習得研究からみた発音習得とその可能性についての一考察—臨界期仮説と外国語訛りを中心に—」. 『東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集』, pp.33-55.
- 竹林滋・斎藤弘子. 2008. 『新装版 英語音声学入門』. 東京: 大修館書店.
- 竹林滋・清水あつ子・斎藤弘子. 2013. 『改訂新版 初級英語音声学』. 東京: 大修館書店.
- 那須川訓也. 2018. 「英語音声の仕組み」. 村野井仁(編)『コアカリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』, pp.144-159. 東京: 大修館書店.
- 西山淳子. 2018. 「期間の副詞句 for と since 句と現在完了形の用法」. 日本英文学会関西支部第13回大会(2018年12月10日, 於神戸女学院大学)における研究発表.
- 深澤俊昭. 2015. 『改訂版 英語の発音パーフェクト学習事典』. 東京: アルク.
- 松坂ヒロシ. 1986. 『英語音声学入門』. 東京: 研究社.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jenkins, Jennifer. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.

What should be taught in English Phonetics Classes? :
From the Perspective of English – Teacher Training

SANADA Keisuke

Abstract

This paper aims to consider what English phonetics classes should teach to students, especially to those who are in teacher training curriculum. Those students are reportedly not familiar with the method on how to teach English pronunciations as well as on how to improve their own English pronunciations. Furthermore, English education in Japan has been demanding to further foster students' skills of speaking English (or what is called "communication skills"), and so English pronunciation is mentioned in the Core Curriculum for English teacher training. Based on these situations, this paper focuses on some English sounds, especially the ones which (i) do not exist in Japanese and (ii) are quite similar to English sounds and thus confusing to Japanese learners of English. I then discuss how we produce those sounds and how to enable the learners to produce the sounds.

Keywords: English phonetics, teacher training, Core Curriculum for English teacher training, pronunciations, how to teach English pronunciations

(さなだ けいすけ 本学人文学部准教授 英語学専攻)

- ＊ 本科目の受講者による参加状況やフィードバックは本稿執筆の助けになった。これまでの受講者全員に感謝したい。また、本稿の改良に有益なコメントを下された同僚の水島梨紗氏にも感謝申し上げたい。無論、本稿に残る瑕疵は全て筆者の責任である。
- 1 毎年見られるのは、半母音 /j/ を「ヤ行の音」ではなく「ジャ行の音」と解釈する学生の存在である。例えば、/ju:s/ という発音記号を見て、(正解の)「ユース」(use)ではなく「ジュース」(juice)と誤解する学生が一定数いる。
 - 2 イギリス英語の発音を取り上げる際は小川 (2009)を参考にしていく。
 - 3 コア・カリキュラムのダイジェスト版として、『英語教育』(2017年6月号)のpp.34-39も有益である。
 - 4 静 (2009: 第2部・第3部)と那須川 (2018: 第4節)において、日本人英語学習者が特に注意すべき子音と母音を取り上げている。なお、静 (ibid.)では練習のための素材や方法例も豊富に取り上げられており、授業に重宝している。
 - 5 ただし本科目は英語教員志望者以外の学生も履修するため、発音指導のあり方に関する明示的な指導は行っていない(「このように教えるべきだ」という言い方をしているわけではない、ということ)。その代わり、筆者が発音法を説明する時に用いる「平易な言い回し」を、英語教員志望の学生が教育現場に立った時に取り入れてもらうことで、彼らの発音指導法が(間接的ながら)向上することが期待できる。
 - 6 ここで取り上げる8つの子音是那須川(2018: 第4節)でも取り上げられている。しかし筆者の見限りの、那須川の言い回しは、(紙幅の都合と思われるが)やや凝縮され過ぎていて、英語音声学を専門的に学ぶ人以外にはややとっつきづらい印象を受ける箇所がある。
 - 7 この音の発音記号は / Φ / と書かれ、専門的には「無声両唇摩擦音」と呼ばれる。
 - 8 この3つの音は静 (2009: 164-169)でも取り上げられている。
 - 9 この指導法は松坂(1986: 22)で言及されているが、松坂自身による説明ではなく、当時の日本人英語学習者のあいだで言われていたこととして言及されている。
 - 10 後者の指導方法は、NHKテレビで放送された『3か月トピック英会話 話して聞き取る！ネイティブ発音塾』(講師：斎藤兆史)の2009年1月号のテキストp.46を参照している。なお、この発音の方法について、竹林・清水・斎藤 (2013: 75)は「口を十分に開いてのどに近いところで「ア」という感じで発音する」と書いているが、「口を十分に開いて」を「口を大きく開けて」と学習者に誤解される危惧があると筆者は考え、口を小さく開けるよう指導している。
 - 11 竹林・清水・斎藤 (2013: 82)は「口の奥の方から」発音するとしているが、受講者がその発音方法をよりイメージしやすいように、筆者が独自に「口蓋垂を見せるように」と教えている。
 - 12 こうした発音は専門的には「円唇母音」と呼ばれ、英語音声学の教科書(例、竹林・清水・斎藤 2013)でも「唇をまるめる」という言い方が成される。しかし、筆者の授業の実践の限りでは、「唇を突き出す」と言い、それを実演することで、円唇母音の発音法の理解がより促されるようである。
 - 13 2つ目の音を軽く添える程度、という表現は竹林・清水・斎藤 (2013: 90-94)を参照。
 - 14 「愛している」のように句・節・文に埋め込まれた「愛」は、2つ目の母音が弱く聞こえる。
 - 15 竹林・清水・斎藤 (2013: 112)でも「/t/, /d/から/n/へと移るとき舌先を歯茎から話さないように注意する必要がある」と述べられている。
 - 16 例えば「あんドーナツ」の「ん」を発音する時は舌先が歯茎にくっつく。これは「ん」の直後にある「ど」が舌先を歯茎にくっつけて発音することによる。一方、「あんこ」の「ん」を発音する時はそうならない。「ん」の直後の「こ」も舌先を歯茎にくっつけない(後舌面を軟口蓋にくっつける)からである。
 - 17 類例を1つ挙げる。筆者はある日、CNNのニュースでアメリカ出身のレポーターが“oval office”という句を言うのを聞いたが、W1の語末の /l/ と W2の語頭の /s/ が繋がっていなかった。
 - 18 実際の文では、時を表す副詞句や前後文脈などによってI've foundとI foundを区別しやすくなる。例えば、since yesterdayがついていれば前者、two days agoがついていれば後者の可能性が高い。なお、ここで「後者の可能性が高い」と言い「後者である」と断定していないのは、現在完了形と共起しないと教えられたyesterdayが、実際は現在完了形と共起することが可能である、というHuddleston and Pullum (2002)や西山 (2018)の指摘による。
 - 19 専門的には、音の強弱は「ストレス」、後述する音の高低は「ピッチ」と呼ばれる。
 - 20 川井 (2018: 1.1節)では、言語のリズム、日英語のリズムの違い、リズムの指導の難しさなど、リズムと英語

教育に関する研究成果が概観されている。